

〈海 篇〉諸本考

遠 藤 由里子

1. はじめに

明代萬曆年間（1573～1620）には、一般に〈海篇〉と称される辞書が多種刊行された。この数多くの〈海篇〉は細部では創意工夫の跡も認められるが、幹を成す主要部分は一瞥した限りでは大同小異のようである。ほぼ同様の内容を有する辞書が短期間に版を変えて次々に上梓されたという事実は、この〈海篇〉に対する需要の高さを物語るものであろう。小稿では〈海篇〉研究を進める手懸りとして、今日に伝えられる多種〈海篇〉を概観してみたい。

2. 1. 〈海篇〉とは

基本的には『五音篇海』と『五音集韻』が合刻された『五音篇韻』を根幹とし、書名に〈海篇〉と冠されている辞書の総称である。言う迄もなく『五音篇海』は金・韓道昭、韓孝彦、王與祕が五音に依って部首を分類し、更に部首下において画引き検字法を初めて採用して編纂した〈字書⁽¹⁾〉であり、『五音集韻』は韓道昭が各韻目内を更に五音三十六字母に依って分類配列した最初の〈韻書〉である。この二書が合刻された『五音篇韻』は、〈字書〉〈韻書〉双方の機能を兼ね備えた辞書であると言えよう。更に、この『五音篇韻』に文字学・音韻学修得上必須とされる啓蒙的な多種知識を加えて刊行されたものが〈海篇〉である。

3. 2. 現存する〈海篇〉類

〈海篇〉に関してこれ迄まとまった形で論ぜられたものとしては、福田襄之介『中國字書史の研究』第三節「明代の字書 一、海篇類の研究」（以下

福田1960と略称⁽²⁾、船津富彦「明代の俗字書—明版海篇類管見—」⁽³⁾（以下船津1964と略称）があるが、この二者を除いては殆どとり上げられていない。

〈海篇〉研究にあたってはあらゆる角度からの考察が必要とされるであろうが、それには先ずいか程の〈海篇〉が伝えられているかを知らねばならない。筆者は内閣文庫所蔵本を中心に調査を行ったが、実際に確認できなかったものについては、各種蔵書目録及び船津1964を以って補った。以下に示すのが現在に伝えられている〈海篇〉を、その書名に依って分類し、ほぼ刊行年代順に並べたものである⁽⁴⁾（書名、巻数、撰者、刊年、蔵処の順、尚蔵処右肩は*は船津1964に依った事を示す）。

- 1 ① 經史海篇直音 五 未詳 明初 中央圖書館
- ② 新校 經史海篇直音 四 未詳 萬曆三年（1575）中央圖書館・北京大學圖書館
- ③ 新校 經史海篇直音 五 未詳 明 内閣文庫・上野図書館*・中央圖書館
- ④ 重校 經史海篇直音 十 未詳 明 尊經閣・中央圖書館
- 2 ① 龜頭 海篇心鏡 二十 蕭良有 萬曆十年（1582）神宮文庫
- ② 翰林筆削字義韻律繁頭 海篇心鏡 二十 蕭良有著・余應奎訂 萬曆十二年（1584）序刊 美國國會圖書館
- ③ 翰林筆削字義韻律繁頭 海篇心鏡 二十 蕭良有撰・余應奎訂 萬曆二十二年（1594）蓬左文庫
- ④ 翰林筆削字義韻律繁頭 海篇心鏡 二十 蕭良有 萬曆 尊經閣
- ⑤ 翰林筆削字義韻律繁頭 海篇心鏡 二十 朱子藩 萬曆三十年（1602）中央圖書館*
- ⑥ 翰林重放字義韻律大板 海篇心鏡 二十首一 劉孔當校 萬曆二十四年（1596）内閣文庫・上野図書館*・早稲田大学図書館*・旧北京人文科学研究所*
- ⑦ 翰林重放字義韻律大板 海篇心鏡 零本 蕭良有 萬曆 尊經閣
- ⑧ 翰林重放字義韻律大板 海篇心鏡 十七 陳五昌訂 明 内閣文庫
- ⑨ 翰林詳校字義韻律繁頭 海篇心鏡 二十 蕭良有 萬曆四十一年（1613）米澤圖書館

- 3 刻太古遺踪 海篇集韻大全 三十一 鄒德溥彙集・夏双仁補遺 萬曆十三年(1585)早稲田大学図書館*
- 4 ① 三台館仰止子 海篇正宗 二十 余象斗纂・李廷機校 萬曆二十六年(1598)美國國會圖書館
② 三台館仰止子 海篇正宗 二十 余象斗 萬曆 尊經閣
- 5 重校古本 五音類聚四聲切韻直音海篇大全 十四首一 韓孝彥校 萬曆三十年(1602)序刊 內閣文庫・蓬左文庫
- 6 鼎刻嘉閣放 海篇大成 二十 曾六德輯校 萬曆三十二年(1604)內閣文庫
- 7 錄五車字義 四明海篇 十三首一 吳亮脩輯 萬曆三十七年(1609)內閣文庫
- 8 鼎鑄洪武元韻勅 海篇玉鑑 二十 武緯子補訂・王衡勘正 萬曆 內閣文庫⁽⁶⁾
- 9 ① 鼎鏤木天 海篇棲鶴 二十 唐文獻校 萬曆 上野文庫*
② 鼎鏤木天 海篇棲鶴 十五 凌霄鳳訂 明 內閣文庫
- 10 精刻海若湯先 海篇統匯 二十首一 未詳 天啓元年(1621)序刊
生校訂音釋 美國國會圖書館
- 11 ① 遵古本 石齋海篇 三十八 黃道周⁽⁶⁾ 己卯⁽⁷⁾序刊 內閣文庫
正韻
② 遵古本 石齋海篇 四十 黃道周〔崇禎〕十四年(1641)蓬左文庫
正韻
③ 群玉海篇 三十八日一 黃道周等・陳仁錫等校 崇禎 宮內廳書陵部
- 12 海篇犀炤 十五 黃道周訂正 明 上野図書館*
- 13 ① 新鏤閣老台山葉先 海篇星鏡 十九 葉向高撰・朱鼎臣編 明 內閣文庫
生訂釋龍頭切韻
② 龍頭海篇星鏡 十九 葉向高・鄒啓元校 明 宮內廳書陵部
- 14 新鏤陳太 海篇彙編全書 十九 陳仁錫纂訂 明 內閣文庫
史纂訂
- 15 ① 陳明卿太史考 海篇朝宗 十二 陳仁錫閱・譚元春訂 明 內閣文庫・
古詳訂遵韻 早稲田大学図書館*
② 海篇朝宗 十二 陳繼儒著・譚元春校 明 神宮文庫

以上が現存する〈海篇〉の一覧であるが、主に日本、特に内閣文庫にその多くが伝えられている。この内閣文庫所蔵〈海篇〉を中心として以下に順を追って、それぞれの梗概を述べる。

3. 1. 〈經史海篇直音〉

①・②・③・④は等しく中央圖書館に収められている。『国立中央圖書館善本書目初稿』⁽⁸⁾ 卷一 經部 小學類 字書之屬にはそれぞれ次の様に記されている。

- ① 經史海篇直音五卷五册 不著撰人 明初刊藍色印本 清鄭文焯手跋
- ② 新校經史海篇直音_#四卷八册 不著撰人 明萬曆三年司禮監刊本
- ③ 新校經史海篇直音五卷五册 不著撰人 明刊黒口本
- ④ 重校經史海篇直音十卷十册 不著撰人 明刊本

②は又、北京大學圖書館にも収められている。『中國善本書提要』⁽⁹⁾ 經部 小學類 2 字書には、

新校經史海篇直音五卷 五册 明萬曆間刻本

不詳撰人姓氏。卷前有：“萬曆三年四月十七日司禮監奉旨重刊”字樣、則原書應纂成于萬曆三年以前。…

とあり、「五册」本であること、「重刊」であることが先の中央圖書館本の記載と異なるが、同年の同じく司禮監本（經廠本）である事から同一刊本とした。

他の〈海篇〉類の多くが萬曆年間に出版されているのに対し、①は明初という極めて早い時期に出版されている。その内容はうかがい知れないが、〈海篇〉と冠される辞書の嚆矢となるものであろう。又、「新校」或は「重校」とも示されていない所から、原本「經史海篇直音」と思われる。

①を「新校」したものが②・③であり、更に「重校」したものが④ということになるが、これ等「經史海篇直音」間で如何なる校正が行なわれたかは、筆者はそれぞれを目にし得なかったため、不明である。ここでは内閣文庫にも収められている③について述べる。

本書は序・刊記等がなく、撰者も記されていない。各巻の構成は以下の通りである。

卷一 金部第一～歹部第七十九／卷二 東部第一～支部第七十七／卷三 皮部第一～△部第八十／卷四 司部第一～石部第九十一／卷五 香部第

一～日部第一百十七

金部から日部まで計444部首が牙舌唇齒喉五音の順に並べられ、各部首内では所属字が筆画順に配されている。又、所々㊸・㊹等画数を明示してある。金部第一の最初の部分を示す。

金部第一凡一千三十一字

金 音今五
色也 針 音鍼
義同 鉞 音弋鼎附
耳外也 ……

筆頭字「金」が牙音（見母）字であり、以下「金」を部首に持つ字が続く。無論二番目以降はその大部分が見母所属字ではない。この様に『五音篇海』と同じく、五音によって部首を分類し、各部首所属字を画数順に配列した型を以下A型とする。

本書は〈韻書〉に相当する部分がない。書名に「海篇」と冠してはいるものの、この点は他の〈海篇〉と大きく異なり、又、後述のように〈海篇〉の多くが上下二層本であるのに、本書は一層本であり、例外的な存在である。

3. 2. 〈海篇心鏡〉

総じて〈海篇心鏡〉と称されるものを、更に〈海篇心鏡〉に冠されている呼称に依って分類すると、①「鼈頭」、②・③・④・⑤「翰林筆削字義韻律鰲頭」、⑥・⑦・⑧「翰林重攷字義韻律大板」、⑨「翰林詳校字義韻律鰲頭」の四種に大別される。しかしこれ等の呼称は必ずしも固定したのではなく、流動的呼称で、同一書の中でも様々な呼称が用いられている。例えば⑧は、「海篇明鏡」・「翰林重攷字義韻律大板海篇」・「翰林字義韻律大板海篇」・「翰林重攷字義京本大板海篇」・「京本大板海篇心鏡」・「京板海篇明鏡」という様に先に挙げた呼称と合わせて、実に7種類が用いられている。この傾向は⑧にとどまらず、他の〈海篇心鏡〉更に〈海篇〉類全体についても見られる。よってその細かな呼称から〈海篇心鏡〉、更には〈海篇〉を分類するのはそれ程意味のある事とは考えられない。又、①・②・③・④・⑤・⑨呼称中の「鼈頭」・「鰲頭」とは魁本、即ち上下二層に分かたれた二層本の事であり、「鼈頭」・「鰲頭」と冠されていない⑥も又二層本である。

次に撰者であるが、①・②・③・④・⑦・⑨蕭良有、②・③余應奎（訂）、⑤朱子藩、⑥劉孔當（校）、⑧陳五昌（訂）の5人がそれぞれの編纂に携わった事になる。中でも蕭良有は6種〈海篇心鏡〉に撰者としてその名があがっているのは注目に値する。これだけ多数の蕭良有〈海篇心鏡〉が刊行された

という事実は、蕭良有〈海篇心鏡〉に対する当時の高い需要があった事を裏付けるものであろう。5人の中、余應奎・朱子藩については史料が伝わらないため、如何なる人物であったか不明である⁽¹⁰⁾。

蕭良有は『明史』に伝はないが、『明人傳記資料索引』⁽¹¹⁾には次の様な記載がある。

蕭良有、生年は嘉靖二十九年（1550）、卒年は萬曆三十年（1602）。字は以古、號は漢冲、湖廣漢陽府漢陽縣の人。萬曆八年（1580）第一甲進士。翰林院修撰を拜命し、のち國子監祭酒。史局に十五年在り、三公四輔の信望あつく、凡そ国家の大計に関して諮問されない事はなかったが、給事中の葉繼美の弾劾にあつて失脚、著には玉堂遺稿がある。⁽¹²⁾

劉孔當も『明史』に伝は載せられていないが、『安福縣志』⁽¹³⁾に依ると、生卒年は不明であるが、

劉孔當、號は喜聞、江西吉安府安福縣社下の人。萬曆壬辰二十年（1592）の第二甲進士。官は翰林院庶吉士、のち翰林院編修。⁽¹⁴⁾

次に陳五昌については更に史料が少なく、『明清進士題名碑録索引』⁽¹⁵⁾に依ると、

福建侯官縣の人、萬曆三十二年（1604）の第三甲進士。

となる。蕭良有・劉孔當・陳五昌は共に科挙に合格はしているが、余應奎・朱子藩も含めて『明史』に伝が載せられていない所から、少くとも当代第一級の官吏或は文人として評価されていなかった模様である。

〈海篇心鏡〉とは如何なる〈海篇〉であるのか。⑥・⑧の内閣文庫所蔵本を中心に述べる。

⑥は上下二層に分かたれ、それぞれ二十巻首一卷計二十一巻で構成されている。各巻の構成は以下の通りである。

〈上層〉
首～四巻 十字釋義⁽¹⁶⁾ 諸家篆式 夷字音釋⁽¹⁷⁾ 分毫字義⁽¹⁸⁾ …／五巻 書經難字 周易上下經難字／六巻 詩經難字／七・八巻 禮記難字／九巻 春秋難字 小學難字／十～十

〈下層〉
首・一卷 蒼頡始製文字 字有六書⁽¹⁹⁾ 字有五音⁽²⁰⁾ …／二～二十巻 天文門：天部第一～光部第十一 時令門：歲部第一～更部第五 地理門：京部第一～門部第二十二 人物門：舜部第一～鬼部第二十四 聲色門：音部第一～丹部第十一 器用門：皿部第一～鬻部第四十 身體門：身部第一～尸部第二十八 花木門：竹部第一

三卷 韻律平聲：一東～
二十二鹽／十四・十五卷
韻律上聲：一董～二十
二琰／十六～十八卷 韻
律去聲：一送～二十二豔
／十九・二十卷 韻律入
聲：一屋～十葉

～艸部第二十五 宮室門：广部第一～宀部第八
飲食門：鹵部第一～鹽部第七 鳥獸門：鳥部第
一～虫部第三十七 干支門：干部第一～亥部第
二十二 卦名門：爻部第一～卜部第三 文史門
：文部第一～冊部第三 珍寶門：金部第一～玉
部第四 人事門：才部第一～死部第七十 衣服
門：衣部第一～系部第十 數目門：一部第一～
卅部第十三 通用門：高部第一～哉部第一百十
三

先ず、上下層に亘って文字学及び音韻学修得上必須とされる初学的啓蒙的
な知識を載せ、次いで上層には書・易・詩・禮・春秋の五經難字と小學難字、
そして韻律平・上・去・入聲の計76韻から成る〈韻書〉を、下層には天文門
～通用門の計19門456部首から成る〈字書〉を配している。例として韻律平
聲一東及び天文門の最初の部分を示す。

韻律平聲 一東 共三百五十六字

東 音冬、動也、東方陽氣 凍 音東、夏 ……
動、於時爲春、又姓也 月暴雨

天文門 天部第一 凡四十五字

天 音添、上 炗 天字 ……
玄也 古文

〈韻書〉部分は従來の韻書の注釈と比べて特に異なる所はない。しかし〈字
書〉部分は〈經史海篇直音〉（3. 1. ②）の各部首を五音の別で分類する
A型とは異なる。即ち、全部首をそれぞれの持つ訓詁機能に従って天文門・
地理門等に分類⁽²¹⁾し、更に各部首内は画数順に所属字を配列するという方
法を採っている。この分類型を以下B型とする。

⑧もその構成は⑥とほぼ同じであるが、⑥が全二十一卷であるのに対し、
⑧は十七卷の上層は韻律去聲十二嘯、下層は人事門瘡部第四十九で終っており、
明らかに十八卷以下を欠いた缺本である。⁽²²⁾ 以上が内閣文庫所蔵〈海
篇心鏡〉の概要である。

②は『中國善本書提案』經部 小學類2字書に

海篇心鏡二十卷 十二册 美國國會圖書館 明萬曆間刻本

原題：“翰林院編修漢冲蕭良有著、上饒瀘東余應奎訂、東汝紹東王廷
極、繡谷龍泉唐廷仁校梓。” 書題作：“翰林筆削字義韻律鰲頭海篇心
鏡。” ……

自序〔萬曆十二年（一五八四）〕

とあり、更に、本書は翰林院編修の官にあった蕭良有の名に託して、余應奎が『篇海類編』に依って編纂したものであろうとしている⁽²³⁾。これが事実であれば他の蕭良有撰〈海篇心鏡〉、特に同じく蕭良有撰・余應奎訂の③は実質撰者が余應奎である可能性が大となるが、この点の解明は将来の課題としたい。

③は『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』經十 小學類に次のように記されている。

翰林筆削字義韻律鰲頭海篇心鏡二十卷 六冊 明・蕭良有撰 余應奎訂 萬曆二十三年唐氏世德堂刊本 有御本印記 駿河御讓本

⑨は『米澤善本の研究と解題』⁽²⁴⁾ 漢籍之部 經部に以下の解題がある。

翰林詳校字義韻律鰲頭海篇心鏡二十卷 八冊 明蕭良有編 萬曆四十一年聚奎樓李湖刊本

…その體例は、各葉を上下二段に分ち、上段には同韻異字を一行に二字ずつ排列して音と簡単な意味とを小字二行に注し、下段は事項別に天文、地理等の門に大別したうえで、その中に數部の區分を作り、一行に概ね六字ずつ、部首を除いた字畫數によって分類してそれぞれ小字二行の注を上段と同様につける。卷首に呉黙因の詳校海篇心鏡序、卷一の末に金陵の聚奎樓李湖（小泉）の識語がある。…

上段〈韻書〉の韻目数及び下段〈字書〉の総部首数は不明であるが、「事項別に天文、地理等の門に大別」とある所から、部首分類はB型である。

3. 3. 『刻太古遺踪 海篇集韻大全』

船津1964に依れば本書は、

3 1 卷6冊、「翰林院の鄒德溥⁽²⁵⁾彙集」「武夷の逸士夏双仁補遺」、萬曆13年積善堂刊、文字の分類は「天文・地理といったように分ける」所から、部首分類はB型、

とある。

3. 4. 『三台館仰止子 考古詳訂遼韻 海篇正宗』

①は『美國國會圖書館藏・中國善本書目』⁽²⁶⁾ 小學類 2 字書に、海篇正宗二十卷 十冊

明萬曆間余氏雙峯堂刻本

原題：「三台館山人仰止余象斗纂、國子監祭酒九我李廷機校、書林雙峯堂文台余氏刊」。書題作：「三台館仰止子考古詳訂邊韻海篇正宗」、……卷一載琉球國夷字音釋、則成書在劉孔當後也。卷末有：「萬曆戊戌春月余文台繡梓」牌記、……

とあり、本書は余應奎撰・李廷機校⁽²⁷⁾、又卷一に〈海篇心鏡〉（⑥・劉孔當校）の「夷字音釋」を転載している所から〈海篇心鏡〉後の成書となる。

②は船津1964に

海篇朝宗 20卷8冊（明）余象斗 万曆48年 尊經閣・中央図書館⁽²⁸⁾……海篇類の中、朝宗系に、当時の琉球の人々から聞いたという日本語が「夷字音釈」と題されて、いろは48文字に、それに近い中国発音の文字をあてている。……

（圈点は遠藤）

とあるが、先ず「海篇朝宗」は「海篇正宗」の誤植であろうが、「万曆48年」は不可解である。『尊經閣文庫漢籍分類目録』には「明萬曆版」と記すのみで刊年には触れていない。①と同じく「夷字音釋」を載せる。

3. 5. 『重校古本五音類聚四聲切韻直音海篇大全』

内閣文庫と蓬左文庫にそれぞれ収められているが、内閣文庫所蔵本は缺本である⁽²⁹⁾ため、小稿では蓬左文庫所蔵本を使用した。

書名は上記の他に、篇韻全書・四聲音切篇韻全書・重校古本五音類聚四聲音韻直音海篇大全が使用されているが、各巻首及び巻末では一貫して「重校古本五音類聚四聲切韻直音海篇大全」と記されている所から、これを正式名称とするのが妥当であろう。

撰者は、巻之首に「濟陽松水昌黎郡韓孝彥重校」と示されているが、無論これは『五音篇海』段階での「重校」であり、本書を「重校」したのではない。では如何なる人物の手に依ったのであろうか。本書には萬曆壬寅（1602）記年の王穉登序が掲げられている。この王穉登序については已に福田1960に以下の如く述べられている。

「蓋五音篇海」より「遂三十六字母取切大備也」に至るの文は、筆者が目撃した萬曆己丑本（1589）五音篇海の正徳十五年（明の武宗、1520）の滕霄の序のままが載せられている。次に、

茲重加刪補詳校、彙萃上下二編、及經史法門諸書、難字一一搜羅纂入、而部分訓釋亡遺焉、誠還天地之元聲、開萬世之聾聵、大裨于世教、其功豈淺鮮哉、嘻是書一出、昭々乎若揭日月然、天下一聲、四海共韻、而我

高皇帝同文之盛典、其大行于今日歟、時萬曆壬寅孟夏三月吉旦、太原百穀、王禪登撰、序畢

となっている。右の王禪登の序文に見るように、五音篇海と五音集韻に關するものは、五音篇海の正徳十五年（1520）滕霄の序をそのままそっくり轉載してあって、右の五音篇海と五音集韻の影響が大であることを痛感せしめた。…

即ち、序文から察する限りでは『五音篇海』及び『五音集韻』部分を除外した「茲重加刪補詳校、彙萃上下二編、及經史法門諸書、難字一一搜羅纂入、而部分訓釋亡遺焉」部分が本書に新たに加えられたものであり、この増補部分の撰者が王禪登ということになる。

王禪登については『明史』に伝がある⁽³⁰⁾。

王禪登、字は伯穀⁽³¹⁾、蘇州府長洲縣の人⁽³²⁾。幼時より詩を善くし、吳中四才士の一と称された同郷の文徵明没後は、三十年余に亘って詞翰の席を擅にした。又、萬曆中には国史編纂に徴されたが、完成しないうちに史局は廢された。七十余歳で卒。著書に吳郡丹青史一卷、王禪登詩集十二卷がある⁽³³⁾。

詩文に於てその名を馳せた文人の一人であった模様である。

では王禪登は如何なる「重加詳校」を行ったのか。この問題に入る前に、全体の構成を概観すると、本書も又二層本であり、上層に「正韻平・上・去・入聲」と称して全76韻から成る〈韻書〉を、下層に

牙音見溪二母：金部第一～曲部第五十九、
牙音群疑二母：琴部第一～歹部第二十、
舌頭音端透定泥四母：東部第一～宀部第二十九、
舌上音知徹澄孃四母：夂部第一～聿部第二十三、
重唇音幫滂二母：髟部第一～支部第二十五、
重唇音並明二母：皮部第一～木部第三十四、
輕唇音非敷奉微四母：夫部第一～勿部第二十三、
齒頭音精清從三母：夕部第一～△部第二十三、

齒頭音心邪二母：司部第一～夕部第二十六、
正齒音照穿床三母：舟部第一～食部第三十一、
正齒音審禪二母：身部第一～石部第三十四、
淺喉音曉匣影三母：香部第一～一部第五十四、
深喉音喻母：雲部第一～日部第二十八、
半徵半商音來日二母：龍部第一～日部第三十五

の444部首から成る〈字書〉を配し、これが『五音集韻』・『五音篇海』から受け継いだ部分である。加えて、上層には四書五經小學難字音釋、上下層に亘って蒼頡始製文字・篆書八體式・字有六書・分毫字義等26項目を配している。⁽³⁴⁾

上層〈韻書〉の76韻は〈海篇心鏡〉(3. 2. ⑥)と同一であるが、本書は小韻代表字に直音注の他に反切注も併記されている。

例：東 音冬、德紅切、動也、陽氣
動、於時爲春、又陽韻

下層〈字書〉は〈經史海篇直音〉(3. 1. ②)と同じくA型分類444部首で構成されている。更に、本書は各部首字に語頭子音の五音⁽³⁵⁾三十六字母の別を明記してあるが、三十六字母各々に属する部首の配列は〈經史海篇直音〉と全く等しい。注記もほぼ同一であるが、本書では各部首代表字及びいくつかの所属字に直音注とは別に反切注もつけられている。

例：金 音今、居音
切、五色 針 音鍼
義同 ……

以上がその概略であるが、序に「茲重加刪補詳校、……」と言っているのは、先行の〈海篇心鏡〉(3. 2. ⑥)と比べて、五經小學難字の他に四書難字音釋が加えられ、音注に反切注が併記されるようになった点はその主たるものである。

3. 6. 『鼎刻臺閣攷 海篇大成』

本書は「臺閣海篇」・「刻臺閣海篇」・「鼎刻臺閣海篇大成」・「新刻臺閣海篇大成」とも称される。

各巻首には「古閩心藥 曾六德輯攷／書林龍田 劉大易繡梓」、「刻臺閣海篇題辭」には「翰林庶吉士建浦曾六德題」⁽³⁶⁾と記されているが、曾六德に関しては『明史』に記載がない。

刊記に「皇明萬曆甲辰冬月吉旦／書林喬山堂劉龍田繡刻」と記されている

所から、萬曆甲辰三十二年（1604）が刊年である。

本書は上層に76韻から成る〈韻書〉を、下層には19門454部首から成るB型分類〈字書〉を主に配し、更に上層には四書五經小學難字を、上下層に亘って字有五音・字有四聲・三十六字母切字法・奇字便覽等を配している。

一葉ウラには書肆劉氏喬山堂による興味深い識語がある。それは、当時〈海篇〉を著わす者はすでに数十家にのぼっていたが、その内容はただ句を簡潔にして捷徑に努めるだけで、これを使う者は眩惑するのみであった。そこで曾六徳は後学のために校讐に努め、腕の良い刻工に精刻させ、世に出した。これが〈海篇大成〉である、⁽³⁷⁾

と言う。当時已に〈海篇〉と称する書が数十存在していた事、又それ等〈海篇〉はその内容が簡化傾向にあった事がうかがい知れる。⁽³⁸⁾

3. 7. 『録五車字義 六合備放 四明海篇』

「四明海篇」・「録五車字義韻學事類四明海篇」とも称される。

卷十三末に「龍飛萬曆己酉春王正月君王日 三槐堂」と記されている所から、萬曆己酉三十七年（1609）が刊年である。

卷一首に「中書吳亮脩輯／書林惺初校梓」と記される。吳亮は『明史』⁽³⁹⁾・『明人傳記資料索引』に次の記載がある。

吳亮、字は采于、常州府武進縣の人。萬曆二十九年（1601）の第三甲進士。官は御史、のち事に坐して降官、大理寺少卿に終る。著には毘陵人品紀・遯世編・名世編・萬曆疏抄がある。

本書は他の〈海篇〉類とは次の点で異なる。吳亮は「四明海篇凡例」中に、旧刻の四書五經小學難字は〈海篇〉本来の姿ではないので外し／その代りに韻學事類で以って易え／この韻學事類を見れば文字学・音韻学双方の知識が得られるようにした。尚、韻學事類が上聲六語で終わっているのは、その数に限りがあるためである。⁽⁴⁰⁾

と記している。事実、本書に四書五經小學難字は載せられず、上層は

上平聲：一東～十五刪

下平聲：一先～十五咸

上聲：一董～六語

の〈韻書〉を、下層は六書大義・三十六字母切韻法・分毫字義等を首巻に、

一～十三巻に369部首から成る〈字書〉を配している。

上層〈韻書〉部分は先行〈海篇〉に比して、注解が格段に詳細となっている。

例：東多龍切、春方也、動也 詩自西自東 記迎春東郊 選東郊物象新 季東風扇淑氣 鞠東風右掖春 記東風解凍 書平秩東作 孟決諸東方則東流
莊順流而東行 天東杜鼓角漏夫東 ……
王東君旧暖律 王秀句滿蒲東

この膨大な注解が呉亮の言う所の韻學事類であろう。このように詳細な注解を施した事に因り、下層〈字書〉部分とその記載量に於て均衡がとれなくなり、その結果上層は上聲六語で終り、七麌以下の上聲及び去聲・入聲全韻を欠くという甚だ不備な〈韻書〉となったと思われる。平上去入全韻が揃ってはじめて韻書としての機能が發揮されるのであり、呉亮が「韻學上聲載至六語而止者、亦因其數限之也、識者無謂不備」と弁解しても、韻書として最優先される条件が欠落しているのであるから、やはり「不備」なものと言わざるを得ない。

下層〈字書〉は大幅に部首を減少し、369部で構成されている。その分類法は五音に依って分けるA型ではなく、又、天文門・地理門等その訓話機能に依って部首を分けるB型とも異なる。例えば一卷は上部第一から崑部第三十三迄、以下の部首が配されている。

上・下・左・右・天・日・月・月・肉・風・几・雲・雨・火・炙・軋・
 元・气・光・歳・夕・彡・更・明・正・比・此・鬚・凡・尤・凡・亢・
 崑

部首を筆画順に配列したのではなく、同義・反義の部首を集めたと思われる箇所もあるが首尾一貫していない。如何なる基準でこの配列となったのか不明であり、字を検索するのに甚だ不便な〈字書〉と言えよう。上下層を通して、不可解な〈海篇〉である。

3. 8. 『鼎鑄洪武元韻勸正補訂經書切字 海篇玉鑑』

「洪武元韻海篇玉鑑」・「海篇玉鑑」・「玉鑑海篇」とも称される。

各巻首には「京南齋郡士合鼎 武緯子補訂／翰林院編脩維山 王衡勘正／閩建邑書林冲宇 熊成治刊行」と記されるが、補訂を行った武緯子については『明史』等に伝がなく不明である。勘正を行った王衡については『明史』王錫爵（衡の父）伝下に次の記載がある。⁽⁴¹⁾

王衡、字は辰玉、蘇州府太倉州の人。萬曆二十九年（1601）第一甲進士。

官は翰林院編修。

本書の構成は上層に、

五經・小學・通鑑難字 韻律平・上・去・入聲（全77韻）⁽⁴²⁾

下層には、

四書難字 天文類・時令類等全18類⁽⁴³⁾452部首から成るB型分類〈字書〉

を配し、上下層に亘って分毫字義・六書字式・字有五音等を載せる。

下に〈字書〉〈韻書〉の最初の部分を示す。

天文類 天部第一

天 他前切、音添、乾之象也、其氣輕清上浮、運行不息、無物不在覆幬之中、故爲萬物群芳之祖也 ㊦ 无天字 古文 ……

韻律平聲 一東

東 昔冬、動也、東方陽氣動、於時爲春、又姓也 凍 音東、夏月暴雨 ……

「東」字下の注は他の〈海篇〉類と比して特徴有るものとは認められないが、「天」字下の注は格段詳細となっている。概して各部代表字下の注が他の所属字下のそれより詳細な注がつけられている。又、「天」字下の注は後述〈石齋海篇〉該当注と全く一致し、この傾向は〈字書〉部分全体で見られる。

3. 9. 『鼎鏤木天 海篇棲鶴』

「海篇棲鶴」・「鼎鏤木天考正海篇棲鶴」・「鼎鏤海篇棲鶴」とも称される。

①は唐文献校⁽⁴⁴⁾②は各巻首に「武夷後學九苞凌霄鳳輯／書林君明甫楊日湖梓」と記される。

②の構成は、上層に

四書・五經・通鑑・小學難字 韻府上平・下平・上・去・入聲（全106韻）

下層には、

天文門から人事門迄全19門442部首から成るB型分類〈字書〉

を配し、首巻には上下層に亘って三十六字母切韻法・定聲方位・異施字義等を配している。

3. 10. 『精刻海若湯先生校訂音釋 海篇統匯』

本書は『美國國會圖書館藏・中國善本書目』小學類に次の解題が載せられている。

海篇統匯二十卷首一卷 十二册 美國國會圖書館 明天啓間刻本

不著撰人姓氏。書題作“〈精刻海若湯先生校訂音釋海篇統匯〉”、……此本有丘兆麟序云：“坊肆中爲〈海篇直音〉、爲〈海篇心鏡〉、若士湯先生、集〈直音〉、〈心鏡〉之大成、始之以皇、虞篆隸、繼之以四書及六經之疑難者、各爲音釋、而以偏傍從類終焉。……”丘氏無攷、此本殆出兆麟、而託之海若。〈篇海類編〉二十卷、題宋濂撰、屠隆訂、而引有劉孔當說。是書卷首附載〈夷語音釋〉、正有孔當識語、稱“予因昔年遊閩、得遇琉球納款通事、以此告予、故筆之於書、以助觀覽。”大抵〈篇海類編〉本之〈洪武正韻〉、故託諸宋濂；〈直音〉、〈心鏡〉、〈統匯〉、並從〈類編〉出、出自丘兆麟、劉孔當一流人之手。是書依韻分部、已變〈類編〉目次。然註語稍詳、較〈心鏡〉、〈正宗〉等爲猶愈也。……

丘兆麟序〔天啓元年（1621）〕

即ち、天啓元年（1621）序刊、撰者名は記されないが、書名の「海若湯先生校訂」及び丘兆麟が序中に「湯士若先生が〈海篇直音⁽⁴⁵⁾〉・〈海篇心鏡〉を集成したもののが本書であり……」とあるのは、湯顯祖⁽⁴⁶⁾の名に託したものであり、更に〈海篇直音〉・〈海篇心鏡〉・〈海篇統匯〉は〈篇海類編〉を藍本とし、その実質的撰者は丘兆麟と劉孔當である、と言う。又、劉孔當について、「夷語音釋」の劉孔當識語「閩に遊んだ時、琉球納款通事と出会い、その時に得た知識を記したものである」を引いているのが興味深い。先に述べた〈海篇心鏡〉（3. 2. ⑥）の「夷字音釋」もやはり劉孔當撰ということになる。

構成については、篆書・隸書を^{そな}虞え、四書六經難字音釋を載せ、偏傍で類を分け（〈字書〉）、韻で部を分け（〈韻書〉）、注語は〈海篇心鏡〉・〈海篇正宗〉と比べてもやや詳細である、と記すのみで、〈字書〉の部首分類は何型であるのか、又〈韻書〉の韻目数等は明らかではない。

3. 11. 『邊古本 正韻 石齋海篇』

①・②共に

第一集：新刻洪武元韻勘正切字海篇群玉二十卷

第二集：新鐫校正增切大藏直音三卷⁽⁴⁷⁾

第三集：篆林肆攷十五卷

が合刻されたものである。第一集から第三集迄他の〈海篇〉類と同じく様々な呼称が使われている。⁽⁴⁸⁾尚〈石齋海篇〉の「石齋」とは後述黄道周の號である。

③は『宮内廳書陵部・和漢圖書分類目録』⁽⁴⁹⁾語学 二七二辭書に、

群玉海篇 三集三八卷目一卷 明 黄道周等 陳仁錫等校 明崇禎版と記されるが、書名に〈石齋海篇〉を冠してはいないものの、これは上記第一集「新刻洪武元韻勘正切字海篇群玉」中から「群玉海篇」のみを抜き出して書名に当てたと考えられること、①・②同様「三集」であること、撰・校者に黄道周・陳仁錫が挙げられていること等から、〈石齋海篇〉であると見做した。

本書(①)には計四序が附せられている。第一集首にそれぞれ「己卯」「辛巳」と記された鄭大郁の二序、第二集首に「崇禎歲次庚辰」と記された黄道周序、第三集首に「崇禎壬午」と記された徐廣序がそれぞれである。よって第二集は崇禎庚辰十三年(1640)、第三集は崇禎壬午十五年(1642)がそれぞれの序刊年となる。ここで問題となるのは第一集鄭大郁序の「己卯」と「辛巳」である。第二・三集と同じく崇禎であれば「己卯」は崇禎十二年(1639)、「辛巳」は崇禎十四年(1641)となるが、福田1960は、

明の萬曆己卯七年(1579)の序のある「石齋海篇」……⁽⁵⁰⁾

と述べている。「辛巳」については触れられていないが、この二序が附せられている第一集の閱者陳仁錫の生年が萬曆七年頃である事から、鄭大郁序年「己卯」が陳仁錫生年と同じ萬曆七年であるとすれば到底考えられない。「己卯」は崇禎己卯十二年(1639)、「辛巳」も同じく崇禎辛巳十四年(1641)であり、⁽⁵¹⁾これを第一集序刊年とするのが妥当であろう。

撰者については第一集が陳仁錫・閱、第二集が余文熙・較閱、第三集が鄭大郁・輯と記されるのみで、実質「撰者」は示されていない。この三者の中、伝が今に伝えられているのは第一集閱者陳仁錫一人である。『明史』には以下の伝が載せられている。⁽⁵²⁾

陳仁錫、字は明卿、蘇州府長洲縣の人。萬曆二十五年(1597)十九歳で郷試に挙げられ、天啓二年(1622)第一甲進士。官は翰林院編修。のち

天啓帝の寵をほしいままにした宦官・魏忠賢の鐵券文を撰するを肯ぜず、ために罷免される。崇禎元年（1628）旧官に復し、右中允・國子司業・右諭徳・南京國子祭酒等を歴任し、この間には〈神・光二朝實録〉編修に参画したが病を得て卒す。⁽⁵⁵⁾ 諡は文莊。著書は義經易簡録八卷・周禮句解六卷・孝經小學詳解八卷・六經圖考三十六卷・四書語錄一百卷・四書析義十卷・四書備考八十卷・皇明世法録九十二卷・壬午書二卷・漕政考二卷・潛確居類書一百二十卷・經濟八編類纂二百五十五卷・無夢園集四十卷・古文奇賞二十二卷・續二十四卷・三續二十六卷・四續五十三卷・明文奇賞四十卷。⁽⁵⁴⁾

国史を掌る翰林院編修の官にあった所から、『皇明世法録』・『壬午書』等の史書を著わしたのは当然とも言えるが、經史子集全般に亘って実に多数の著作を遺している。中でも『潛確居類書』・『經濟八編類纂』という類書を著わしている事は注目に値する。多種知識が盛り込まれた〈海篇〉は又、類書～百科事典としての一面も併わせ持つ。何れが先行する著作であるかは明らかではないが、〈石齋海篇〉と類書の撰述では、互いに益する所大であったと思われる。

ここでもう一人、第三集序文の撰者黃道周について触れねばならない。『明史』に伝が載せられている。⁽⁵⁶⁾

黃道周、字は幼平、⁽⁵⁶⁾ 號は石齋、漳州府漳浦縣の人。天啓二年（1622）第二甲進士。官は翰林院編修、のち右中允・少詹事・禮部尚書・武英殿大學士等を歴任。崇禎末、抗清のため義兵を率いて江西婺源に至り清兵と戦い敗れ、順治丙戌（1646）六十二歳で刑死。文章の誉は天下に高く、嚴冷方剛で流俗に流されず、ために公卿に畏忌された。天文曆数皇極の書に精通し、易象正・三易洞璣・太函經等を著わした。⁽⁵⁷⁾ 號は、福建所治の銅山島の石室に坐臥していた事に因る。

〈石齋海篇〉に限らず、〈海篇〉撰者の伝には著書に〈海篇〉類を挙げていないが、本書書名に黃道周の號・石齋が冠せられている所から、序文にとどまらず、少なからず〈石齋海篇〉編纂に係わったのではないだろうか。

黃道周は第一集の闕者陳仁錫と接触があったと思われる点がある。先ず共に天啓二年の進士であり、翰林院編修の官に就いた事、次に二人共ほぼ時を同じくして右中允の官をつとめた⁽⁵⁸⁾ 事である。二人の伝には相互交渉があったとは記されていないが、〈石齋海篇〉に迄はつながらないにしても、何ら

かの接点はあったと考えられる。

本書は他の多くの〈海篇〉とは異なり、一層本である。又、先に示したように全三集から成る。その構成は、

第一集：分毫字義 天文類・時令類等全19類454部首から成る〈字書〉
四書五經難字

第二集：三十六字母によって分類された208部首から成る〈字書〉

第三集：五言・七言篆訣歌 篆法字形 毛詩刻石篆 詩韻上平・下平・
上・去・入聲篆 百家姓篆 百家雙姓篆

となっている。第一集にはB型分類〈字書〉、第二集にはA型分類〈字書〉、第三集には106韻から成る〈韻書〉を主に配している。尚、第三集は「篆林肆考」と冠されている所からも解されれように、親字は全て篆書で示してあるのが特徴である。以下に第一集B型〈字書〉、第二集A型〈字書〉、第三集〈韻書〉の最初の部分を示す。

第一集 天文類 天部

天 他前切、音添、乾之象也、其氣輕清、上浮運
行不息無物不在覆幬之中、故爲萬物群芳之祖也 ⊖ 𠄎^{天字}_{古文} ……

第二集 見母第一

金^居部^{第一} 金者五色金也、其色黃、屬四方土生也 ……
又金銀銅鐵之首

第三集

德弘切、說文東動也、从日在木中漢志方陽氣動○夾涼
鄭氏曰、木若木也、日所升降在上曰昃、在中曰東、在下曰

一東 杳、一曰杳方也記大明生於禮圖詩我來自東山
駕言徂車攻孟決諸方則流莊順流而行○坦腹牀

東 東音冬 凍音東 ……
春方 燥 夏暴雨

先ず第一集であるが、鄭大郁（己卯）序は、

ここに重ねて刪補を加え、羣玉を彙萃し、天文地理人事の別を分かちて
面目を一新し⁽⁶⁰⁾ ……

と言うが、この天文・地理・人事等に分類する方法は無論〈石齋海篇〉に初まった事ではなく、〈羣玉〉（韻府羣玉⁽⁶⁰⁾）を彙輯拔萃したという点についても、〈韻府羣玉〉ではこの様な分類は行われていない。⁽⁶¹⁾むしろ第三集で〈韻府羣玉〉は大いに活用されている。先に述べたように、第一集「天」字下の注は〈海篇玉鑑〉該当注と全く一致する所から、第一集〈字書〉は間に他の〈海篇〉が介在している可能性もあるが、〈海篇玉鑑〉の流れを汲むものと考えられる。

次に、第三集は〈韻府羣玉〉の影響を大きく受けている。〈韻府羣玉〉も初梓以来数次に亘って増補が行われ、多種〈韻府羣玉〉が刊行された。その中の一に〈説文解字〉の説解を採り入れた『新増説文韻府羣玉』がある。第三集はこの『新増説文韻府羣玉』の該当字下の注解を殆ど手を加えずに引いている。⁽⁶²⁾先の鄭大郁序の「彙萃羣玉」は第三集に適合する。

以上をまとめると、〈石齋海篇〉はA B二分類に依る二種〈字書〉及び『新増説文韻府羣玉』を藍本とした〈韻書〉を配した〈海篇〉ということになる。

3. 12. 『海篇犀照』⁽⁶³⁾

3. 13 『新録閣老台山葉先生訂釋龍頭切韻海篇星鏡』

本書(①)は「訂釋龍頭海篇星鏡」・「新録閣老台山葉先生訂釋龍頭切韻海篇星鏡」とも称される。⁽⁶⁴⁾

各巻首には「閣老台山 葉向高撰／進士春宇 鄒啓元校／古臨冲懷 朱鼎臣輯／書林誠齋 楊春時梓」とある。鄒啓元・朱鼎臣に関しては不明であるが、撰者葉向高については『明史』に伝がある。⁽⁶⁵⁾

葉向高、字は進卿、福州府福清縣の人。萬曆十一年(1583)第二甲進士。官は翰林院庶吉士。のち禮部尙書兼東閣大學士に拔擢されるが、時の政について具申する毎に斥けられ、ために辞職。再び召されて首輔となり、宦官魏忠賢の擅横に抗するが已にその時ではないことを覺り、位を退く。六十九歳で卒す。諡は文忠。著書は綸扉奏草三十卷・文集二十卷・詩八卷。

葉向高と〈石齋海篇〉第一集の閱者陳仁錫には共通点がある。その一は、共に魏忠賢の專横に職を賭して抗した事である。しかし魏忠賢に関して取沙汰されるのは熹宗天啓年間(1621~1627)であり、果して何時葉向高、陳仁錫が別箇に、或は同時に魏忠賢に抗したのか、その際二人の間に接点は有ったか、仔細に史料を検討する必要がある。

次に、陳仁錫は〈神・光二朝實錄〉編纂に参画したと概に述べたが、『明史』藝文志 正史類の〈光宗實錄八卷〉下に次の注が附せられている。

天啓三年、葉向高等修成、有熹宗御製序。既而霍維華等改修、未及上、而熹宗崩。至崇禎元年、始進呈向高原本、并貯皇史宬。

〈光宗實錄〉は葉向高を首として編纂された史書であり、陳仁錫は共編者の

一人ということになる。この史書編纂を通して二人の間にはかなり大きな接点があったと考えられる。

本書の構成は上層に、

初學入門筆法・三十六字母切韻法・異施字義等 新增四書難字 補釋五經小學難字

及び、洪武正韻品定韻律平・上・去・入聲計76韻から成る〈韻書〉を配し、下層には全巻に亘って天文門・時令門等18門⁽⁶⁶⁾ 444部首から成るB型分類〈字書〉を配している。

3. 14 『新鐫陳太史纂訂 海篇彙編全書』

「海篇全書」又「彙編海篇全書」とも称される。

〈石齋海篇〉第一集閲者である陳仁錫の纂訂による。

本書の構成は上層に、

四書五經通鑑小學難字 分毫字義 韻律平・上・去・入聲（全75韻）

下層に、

字有四聲 四聲指義等 天文門・時令門等全19門457部首から成るB型分類〈字書〉

を配している。本書は表紙ウラに

……編海篇者不一家、總欲令人易曉矣、邇來依舊相沿亥豕之誤、又何勝言、陳太忠悉力刪正、沿古而不膠於古、下既悉心改訂、上則增補諸家所未備者……忠賢堂梓

と記されている。陳仁錫は旧刻に沿いながら亥豕等の誤膠を改め、上層では諸家の不備を補い、下層では専ら考訂につとめた、と解されるが、先行〈海篇〉類と比べてみるに、目立った改訂は認められない。詳細な誤刻の改訂に止まったと思われる。

3. 15 〈海篇朝宗〉

①は各巻首に「長州陳仁錫明卿父闕／景陵譚元春友夏父訂」、②は「陳繼儒著 陳仁錫校⁽⁶⁷⁾」と記される。陳仁錫については概に述べたが、〈石齋海篇〉・〈海篇彙書全書〉そしてこの〈海篇朝宗〉閲者として名が挙げられ、〈海篇〉との係わりは非常に深い。譚元春については『明史』に伝がある。⁽⁶⁸⁾

譚元春、字は友夏、湖廣竟陵の人。詩を善くし、同郷の鍾惺と共にその詩体は竟陵體と称された。著は嶽歸堂集十卷。

②の陳繼儒は船津1964では「目錄の陳繼儒著とあるも誤記」とし、②も①と同様「陳仁錫編 譚元春校」としている。⁽⁶⁹⁾

①各巻の構成は以下の通りである。

卷之一：蒼頡始制文字 字有六書 切字要法 五樣奇字類辨等

卷之二～十：天文門・時令門等19門456部から成るB型分類〈字書〉

卷之十一：四書五經小學難字 分毫字義

卷之十二：韻律平・上・去・入聲（76韻）

多くの〈海篇〉類は二層本であるが、本書は上下二層に分けず一層本である。

3. 16

ここに示すのは以上述べてきた15種32本〈海篇〉の一覧表である。

○ 左端Noは小稿第三節の番号で書名に代えたものである。例：1-①は『經史海篇直音』を指す。

○ 小稿で未確認の事柄は空欄のままとした。

No.	巻 数	撰 者	刊 年	韻目数	部首分類法 : 部首数	二層本○/ 一層本×
1-①	五	未詳	明初			
②	四	未詳	萬曆3(1575)			
③	五	未詳	明		A : 444	×
④	十	未詳	明			
2-①	二十	蕭良有	萬曆10(1582)			○
②	二十	蕭良有(著)・余應奎(訂)	萬曆12(1584) 序刊			○
③	二十	蕭良有(撰)・余應奎(訂)	萬曆22(1594)			○
④	二十	蕭良有	萬曆			○
⑤	二十	朱子藩	萬曆30(1602)			○
⑥	二十首一	劉孔當(校)	萬曆24(1596)	76	B : 456	○
⑦	零本	蕭良有	萬曆			
⑧	十七	陳五昌(訂)	明	(76)	B : 不明	○

No.	巻数	撰者	刊年	韻目数	部首分類法 : 部首数	二層本○/ 一層本×
⑨	二十	蕭良有	萬曆41(1613)		B : 不明	○
3	三十一	鄒德溥(彙集)・夏双仁(補遺)	萬曆13(1585)		B : 不明	
4-①	二十	余象斗(纂)・李廷機(校)	萬曆26(1598)			
②	二十	余象斗	萬曆			
5	十四首一	韓孝彥(校)	萬曆30(1602) 序刊	76	A : 444	○
6	二十	曾六德(輯攷)	萬曆32(1604)	76	B : 454	○
7	十三首一	吳亮(脩輯)	萬曆37(1609)	非 A 非 B: 369		○
8	二十	武緯子(補訂)・王衡(勘正)	萬曆	77	B : 452	○
9-①	二十	唐文獻(校)	萬曆			○
②	十五	凌霄鳳(訂)	明	106	B : 442	○
10	二十首一	未詳	天啓元年 (1621)序刊			
11-①	三十八	黃道周・陳仁錫(閱)・ 余文熙(校閱)・鄭大郁 (輯)	崇禎12(1639) 序刊	106	A : 208 B : 454	×
②	四十	黃道周	崇禎14(1641) 序刊			
③	三十八日一	黃道周等・陳仁錫等(校)	崇禎			
12	十五	黃道周(訂正)	明			
13-①	十九	葉向高(撰)・鄧啓元(校)・ 朱鼎臣(輯)	明	76	B : 444	○
②	十九	葉向高・鄧啓元(校)	明			○
14	十九	陳仁錫(纂訂)	明	75	B : 457	○
15-①	十二	陳仁錫(閱)・譚元春(訂)	明	76	B : 456	×
②	十二	陳繼儒(著)・譚元春(校)	明			

〈海篇〉の流れとして、

一、15種32本の中、8種17本の多数が萬曆年間に刊行

一、8種16本が二層本であり、明らかに一層本と認められるのは3種3本にすぎない

- 一、同種〈海篇〉にとどまらず、複数〈海篇〉編纂に係わった撰者・閲者がある
- 一、〈韻書〉部分は76韻、〈字書〉部分は部首をその訓詁機能によって分けるB型分類が主流であり、⁽⁷⁰⁾ この点では『五音篇海』を継承していない、
が挙げられる。

4. おわりに

数々の問題が残されてはいるが、〈海篇〉諸本の一応の梗概は示せたと考える。これを踏まえて、次稿以降では徐々にそれぞれの〈海篇〉細部に亘る検討を進めたい。

注

- (1) 福田襄之介『中国字書史の研究』明治書院、昭和五十四年二月、380頁。
金の泰和八年(1208)に韓道昭が謂ゆる「五音篇海」十五卷を世に公にした。これが畫引き檢字法を使用した現存する最古の字書である。
尚、従前は明・梅膺祚の『字彙』が画引き檢字法を最初に採用した字書であるとする説が有力であった。
- (2) 上記注(1)を参照。もと昭和三十五年(1960)岡山大學法文學部學術紀要第十二號。
- (3) 『中国語学』第144号、1964年。
- (4) 小稿では書名に〈海篇〉と冠されているものに限定し、同様内容を有する『韻海全書』、『篇海』等は除外した。
- (5) 帙には「釋迦文院藏本」と記される。
- (6) 本書は第一～三集で構成され、それぞれ閲・校・輯者がたてられている。後述3、11を参照。
- (7) 「己卯」については後述3、11を参照。
- (8) 屈萬里全集⑩、聯經出版事業公司、中華民國七十四年二月。
- (9) 王重民撰、上海古籍出版社、1983年8月。
- (10) 余應桂なる人物については『明史』卷二百六十に、朱之蕃なる人物については『明人傳記資料索引』〔注(11)を参照〕に記載があるが、余應奎=余應桂、朱子藩=朱之蕃であると俄には断定できない。
- (11) 臺灣中央圖書館編、中華民國五十三年十二月。
- (12) 蕭良有(1550-1602)字以古、號漢冲、漢陽人。生而穎異、以神童名。萬曆八年會試第一、進修撰、領國子祭酒、在史局十五年、負公輔之望。自閩部卿寺以

- 至臺省、凡關國家大計、靡不咨詢。給事中葉繼美効良有侵六部權、遂再章乞歸、卒年五十三、有玉堂遺稿。
- (13) 清・張召南等撰、康熙十八年序刊。
- (14) 卷之三 人物志 名賢傳：劉孔當、號喜聞、社下人、壬辰會魁、授庶吉士、陞編修…
- (15) 上海古籍出版社、1980年2月。
- (16) 〈海篇心鏡〉の一名「經史海篇正音切韻指南」10字の一字毎に音・義の解釈を示したもの。
- (17) いろは48字に中国語の近似音をあてたもの。例：い以字、ろ路字
- (18) 天文門・地理門等に分類し、混じり易い字について注意を促したもの。
例：早早 上音藻、禮農也 叨叨……
又、別に示衣類・弋戈類等に分類した分毫字義もある。
- (19) 漢字分類の方法を説いたもの。一象形、二會意、三諧聲、四指事、五假借、六轉注。
- (20) 語頭字音をその調音部位によって五つに大別したもの。一宮舌居中 二商舌開張 三角舌縮却 四徵舌掛齒 五羽舌撮口聚。
- (21) 天文門では次の11部首が配されている。天・日・月・風・雲・雨・火・乾・元・氣・光。
- (22) 上下層共十七卷当該葉は途中で切断され、「畢」と墨書されている。
- (23) 此書蓋爲余應奎《篇海類編》纂輯、而託之玉堂中人物者。
- (24) 内田智雄、昭和三十三年八月、臨川書店。
- (25) 『明史』卷二百八十三、儒林二及び『明人傳記資料索引』：字は汝光、號は四山、江西吉安府安福縣の人。萬曆十一年（1583）第二甲進士。『易會』、『春秋匡解』、『學庸宗釋』、『鄒太史全集』等の著書がある。
- (26) 王重民輯録・袁同禮重校、民國六十一年六月、文海出版社。
- (27) 李廷機は『明史』卷二百十七に伝がある。
李廷機、字爾張、晉江人。貢入太學、順天鄉試第一。萬曆十一年（1583）、會試復第一、以進士第二授編修。累遷祭酒…
又、本書の他に〈海篇〉系辞書『韻海全書』を著わしている。
- (28) 『國立中央圖書館善本書目録』に本書は不載。
- (29) 卷五～十缺。
- (30) 卷二百八十八 列傳第一百七十六、文苑四。
- (31) 本書巻之首・『蘇州府志』・『明人傳記資料索引』は「百穀」に作る。
- (32) 本書巻之首は「太原」、『蘇州府志』は「武進」、『明人傳記資料索引』は「吳郡」に作る。
- (33) 著書は『明史』藝文志に依った。
- (34) 〈海篇心鏡〉〔⑥〕は全19項目。本書は上層巻末に品定世事通考釋義 文・武

- 官服色歌 増補請召活套 送禮物活套等を掲げ、この部分は類書的色彩が強い。
- (35) 既に示した如く実際には牙舌唇齒喉の五音を細分し、牙・舌頭・舌上・重唇・輕唇・齒頭・正齒・淺喉・半徵半商の十音としている。
- (36) 「翰林庶吉士」とあるが曾六徳が科挙に合格したという記録はない（『明清進士題名碑録索引』、1980年2月、上海古籍出版社）。
- (37) 海篇之刻、無慮數十家、然非名釐正、惟努句簡捷徑、使覽者眩目惑心、甚切齒之、曾先生爲後學慮至深也、廼於木天之暇、爲勤校讐之功、復擇選良工楷書精刻、廣布於宇内……。
- (38) 識語を見る限りでは曾六徳は簡潔であった句を詳細にしたと解せるが、先行する〈海篇〉と比べて、本書の注記が特に詳しくなったとは思われない。
- (39) 卷二百十九、吳中行（亮の父）傳。
- (40) 一、舊刻書頭各録小學四書五經左史難字、甚爲煩擾、不知總不出於海篇外也、何必多費此番力、故易之以韻學事類
一、韻學事類裨益不淺、博士不可不究心、故載之書頭、呂便查考、庶一開卷而字學韻學兩得之、
一、本刻目下層爲率而卷尾、書頭韻學上聲載至六語而止者、亦因其數限之也、識者無謂不備
（全18条）
- (41) 卷二百十八。尚、科挙合格年は『明清進士題名碑録索引』に依った。
- (42) 〈海篇心鏡〉〔⑥〕・〈海篇大成〉等の76韻に吼韻（上聲）が加えられている。
- (43) 他のB型分類は殆どが19類（門）であるが本書では「文史類」がたてられていない。
- (44) 『明史』卷二百十六 唐文獻傳：字は元徴、松江府華亭縣の人。萬曆十四年（1586）第一甲進士。官は翰林院編修、のち禮部右侍郎となり翰林院の事を掌る。著者は占屋堂集十六卷。尚、凌霄鳳は『明史』等に伝不載。
- (45) 〈經史海篇直音〉を指すと思われる。
- (46) 『明史』卷二百三十に伝がある。尚、丘兆麟は『明史』に伝はないが『明人傳記資料索引』に次のように記されている。
丘兆麟（1572-1629）字毛伯、號太丘、臨川人。萬曆卅八年進士、擢御史、崇禎初爲河南巡撫、政事畢飭、尤盡心獄事、卒年五十八。百學餘園、永暄亭、玉書庭等集。
- (47) ②の第二集は『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』に「新刻洪武元韻勘正大藏直音三卷卷首二卷」とある。
- (48) 新刻洪武元韻勘正經書切字海篇群玉・新刻洪武元韻増補切字海篇群玉（以上第一集）、新刻洪武元韻勘正大藏直音（第二集）等。
- (49) 昭和二十六年三月。

- (50) 402頁。又、当序は「……清吏司主事北海張忻撰」であると示されている。①・②共に「張忻撰」とは記されていない。又、「清吏」とあるのも不可解である。明代ではなく清代の序ではないだろうか。氏は少なくとも①・②とは別の「石齋海篇」を使用された様である。
- (51) 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』は第一集序年を「己卯」ではなく「辛巳」を採り、〔崇禎〕十四年としている。
- (52) 卷二百八十八、文苑四。
- (53) 「年十九、舉萬曆二十五年鄉試」から生年は萬曆七年（1579）、「崇禎改元、召復故官…越三年、即家起南京國子祭酒、甫拜命、得疾卒。」から卒年は崇禎四年（1631）頃と考えられる。『明人傳記資料索引』は「崇禎七年卒」としている。
- (54) 著書は『明史』藝文志に依った。
- (55) 卷一百四十三。長文の伝である。
- (56) 『漳州府志』は「幼予（玄）」に作る。
- (57) 『明史』藝文志には他に、洪範明義四卷・月令明義四卷・坊記集傳二卷・表記集傳二卷・緇衣集傳二卷・考經集傳二卷・榕壇問業十八卷・石齋集十二卷・續離騷二卷が挙げられている。
- (58) 陳仁錫は「崇禎改元、召復故官、施進右中允」黃道周は「崇禎二年起故官、進右中允」（圈点は遠藤）。
- (59) 「…茲重加刪補、彙萃羣玉、分天文地理人事別新一、俾觀者了然、試天地之元聲、開萬世之聾聵、大有裨于世教者……」。尚、福田1960は『聖校本五音類聚四聲切韻直音海篇大全』王穉登序は上の序を転載したものであるとされているが、序刊年から考えれば、逆に鄭大郁序が王穉登序を転載したことになる。
- (60) 元の陰時夫・中夫兄弟の撰。
- (61) <韻府羣玉>では「該載事目」として以下の事柄を挙げているが、一箇所にまとめて配してはいない。天文・地理・時令・歳名・人物・人事・氏族・人名・身體・官職・性行・壽典・百穀・飲食・服飾・宮室・器用・舟車・文學・經籍・技術・禽獸・鱗介・昆蟲・竹木・花果・珍寶・燈火・顔色・數目。
- (62) 『新增說文韻府羣玉』該当注を下に示す（圈点箇所が<石齋海篇>と異なる）。
- 徳紅切[説文] 榮動也、从日在木中、漢志方陽氣動○夾溱鄭氏曰、在下曰杳、一曰春方也、記、大明生於__、礼、器、詩、我來自__、東山、駕言徂__、車攻、孟、決諸__方則__流、莊、順流而__行○坦腹__床、詳床。
- (63) 船津1964には「15卷5冊（明）黃道周訂正明刊 上野図書館」と記されるだけである。
- (64) ②は『宮内廳書陵部・和漢圖書分類目録』語學 二七二辭書に、龍頭海篇星鏡 一九卷（有落丁） 明 葉向高 鄒啓元校 明版と記される。「龍頭」とある所から二層本である。

- (65) 卷二百四十。
- (66) 數目門が立てられていない。
- (67) 『神宮文庫圖書目錄』二支那語辭書 い分類辭書に依る。
- (68) 卷二百八十八 文苑四。
- (69) 陳繼儒は『明史』卷二百九十八に伝がある。
- (70) B型は音韻学の知識がなくても検索できるという利点があり、A型に比してより軽便であったためであろうか。